

## 弥源太殿御返事

又御祈禱のために御太刀同じく刀あはせて二つ送り給はて候。此の太刀はしかるべきかぢ作り候かと覚へ候。あまくに、或は鬼きり、或はやつるぎ、異朝にはかむしやうばくやが剣に争でかことなるべきや。此を法華経にまいらせ給ふ。殿の御もちの時は悪の刀、今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬へば鬼の道心をおこしたらんが如し。あら不思議や、不思議や。後生には此の刀をつえとたのみ給ふべし。法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。但し日蓮をつえはしらとたのみ給ふべし。けはしき山、あしき道、つえをつきぬればたをれず。殊に手をひかれぬればまろぶ事なし。

南無妙法蓮経は死出の山にてはつえはしらとなり給へ。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給ふべし。日蓮さきに立ち候はゞ御迎へにまいり候事もやらん。又さきに行かせ給はゞ、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。此の事少しもそら事あるべからず。日蓮法華経の文の如くならば通塞の案内者なり。只一心に信心おはして靈山を期し給へ。

(七二二頁十一行目〜七二三頁三行目迄)

本抄は文永十一(一二七四)年二月二十一日、佐渡一谷で御年五十三歳の時に認められた御消息です。弥源太は北条一門の人で、文永五(一二六八)年には、諸宗との公場対決を迫る『十一通御書』のうち一通を送られています。この前後に、弥源太は大聖人の教えに帰依したと考えられ、自身の大病をきっかけに信仰を深めました。

先ず、本抄の始めには、一族すべてが謗法のなかを弥源太が大聖人様の教えに従い、法華経を信受するようになったことは、不思議な因縁であると示されています。そして、三世の諸仏が法華経を発心・修行の杖と頼ったように、弥源太はこれ以後、大聖人を杖・柱と頼んで一層強盛に信行に励み、成仏を願っていくよう諭されているのであります。

また後段では、大聖人が天照太神ゆかりの安房国に生を受けた因縁を通して、親徳具備の一端を示されているのであります。そして最後に、信心に怠りなく、必ず所願を成就するよう弥源太夫妻を励まされて本抄を結ばれているのであります。

ところで、弥源太が何を祈ったのかは、定かではありませんが、このお手紙によりますと、弥源太が太刀と刀を大聖人様に御供養したことが書かれています。この度の太刀と刀の御供養は、或いは闘病平癒の為の御供養なのか、文面には明らかではありませんが、この度の太刀と刀の御供養に対してなのか、或は、もしかして、文永十一年(一二七四年)二月と考えると、即ち、その時代的背景から考えますと、迫りくる蒙古襲来に備えての、敵国調伏、或いは武運長久の祈りの為の御供養であったのか、判りませんが、大聖人様は北条弥源太の御供養の太刀に触れられて、「此の太刀はしかるべきかぢ作り候かと覚へ候。あまくに、或は鬼きり、或はやつるぎ、異朝にはかむしやうばくやが剣に争でかことなるべきや」と、即ち、この太刀が一流の鍛冶によって作られた立派な太刀であることを讃えられ、そのような貴い刀を供養した信心を讃えられているのです。

そして、刀は武士にとって命であり、なかならず名のある刀鍛冶の作った刀は、家宝

として代々伝えられたものであったようです。大聖人様は、そうした立派な太刀、刀を御供養した弥源太の潔い信心を見られたのでありました。

そして、次に、そのような弥源太の信心の御供養によって、刀自体、悪の刀から善の刀へと変わり、弥源太の後生を助ける杖となるであろうと述べられているのです。そして更に前の段に「法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし」と、法華経こそ死後の安穩を助け守ってくれる、もともと力強い杖、柱であることを強調され、その法華経の行者である大聖人を頼りとすべきことを勧められているのであります。

そして、「殿の御もちの時は悪の刀・今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし」と仰せですが、いうまでもなく刀は殺生、なにかんづく殺人の道具である故、したがって、本来ならば、これを持てば、使う人を悪道に引き込む悪鬼であると教えられているのです。

しかるに、法華経への信心によって、真実の法華経の行者である日蓮大聖人様に御供養されたことによって、この刀は、その持ち主である弥源太を、死後、悪道に堕ちないように支える善の刀となりえたのであるとの仰せなのであります。

それが、あたかも悪鬼が道心を起こして妙法を信ずる人を助ける善鬼となったようなものだと言喻的に「鬼の道心をおこしたらんが如し」といわれたのであります。この背景には、「悪を転じて善となす」と、いわゆる「変毒為薬」の、妙法の功力の原理があると同時に、それはひとえに、持ち主である弥源太の法華経への純真な信心によるものであることを忘れてはならないのです。

もとより、殺人は恐るべき罪ではありますが、しかし、当時の社会にあつて、武士として生きてゆく人々にとって、それから逃れるすべはなかったのです。仏法は殺生、殺人をあくまで罪としながらも、そうした罪のなかに生きざるをえない人々をも救う大慈悲の教えであります。

されば、この段を拝して、仏法は殺人を認めるかというならば、それは大なる誤りであり、そうした時代の、武士という身に生まれた人々にとって、これは避けがたい運命だったのであり、もし、これを絶対悪として排撃するならば、それこそ無慈悲な事なりましよう。

さらにいえば、人間は生きていくうえで、さまざまな悪をなさざるをえない時もあり、他の生き物の生命の犠牲なくして、生命は維持できないからでありますから、もし、厳しく罪を挙げ、これを弾劾するならば、だれびとも救われないうちになつてしまうのです。

仏法は、そうした避けがたいあらゆる悪に対して、法華経の信による変毒為薬を教え、救いの道を開いたのであります。

また、「法華経は三世の諸仏・発心のつえにて候ぞかし、但し日蓮をつえはしらともたのみ給うべしと仰せられています。これは、法華経すなわち南無妙法蓮華経が過去・現在・未来のあらゆる仏にとって「発心のつえ」であるとの仰せであります。この「発心のつえ」とは、「南無妙法蓮華経を根本に信を起こし、不退の境地に入り、仏道を遂げることである」との仰せであります。即ち、この御文は、したがって南無妙法

蓮華經こそ、三世にわたって仏法のもつとも究極であることを断言されているのであります。

さらに「但し日蓮をつえはしらともたのみ給うべし」とは、日蓮大聖人こそ、この南無妙法蓮華經の法と一体である久遠元初の自受用報身如来であるとの意味であります。即ち、人法一箇の御本仏であることを宣言された御文と拝することができのです。

このことは、以下「南無妙法蓮華經は死出の山にては・つえはしらとなり給へ、釈迦仏・多宝仏上行等の四菩薩は手を取り給うべし」の御文で、南無妙法蓮華經が本仏であり、釈迦・多宝はその迹であり眷属であることを示されていることによって、さらに明らかであり、「日蓮・法華經の文の如くならば通塞の案内者なり」は、「人」の立場の御教示であります。

このように、この御文では日蓮大聖人が人法一箇の御本仏であり、もつとも究極最高の仏であるがゆえに、大聖人の教えに帰依するならば、死後未来の安穩は、絶対に得られることを具体的な表現をもって教えられているのであります。

私達が信心修行をして成仏の境界に近づこうとすると、それを阻もうとする魔が必ず競い起こってきます。それは「魔競は必ず正法と知るべからず」（兄弟抄・御書九八六）と示されるように、大聖人様の教えが正しいからです。この魔に負けなためには、何よりも自らの信心を強盛にすることです。

御法主日如上人猊下は常に「信心とは実践なり」と御指南なされています。強盛な信心は、自らの弱く怠惰な心に打ち勝ち、一步踏み出す実践によつてこそ培われるのです。本抄において大聖人は、自らを「通塞の案内者」と仰せになり、末法の御本仏として衆生の闇を滅し、今生だけではなく、臨終の後までも、人々を成仏へと導く大導師であると明かされているのであります。したがって私達は、大聖人を久遠即末法の御本仏と拝し奉り、妙法を固く受持し、大聖人が導いて下さる成仏の道をただひたすらに歩んでいくことが、何よりも肝要となるのであります。

ところで「靈山」について大聖人は御義口伝（一七七〇頁）に「靈山とは御本尊並びに今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者の住处を説くなり」と仰せです。すなわち、本門戒壇の大御本尊おわします総本山大石寺はもとより、本宗寺院や正しい御本尊を信じて題目を唱える場所は、そのまま靈山浄土と開かれるのです。

総本山第六十七世日顕上人は「通塞の案内者」の一文を引かれて、「やるべきことは一切、判っているはずです。唱題行をしつかり行っていくときには（中略）ふさがっているのだらよいかという問題に対して、そこに必ず解決の道が一つひとつ自然に表れてくるのです（中略）一時間でだめだったら二時間、二時間でもまだ足りないと思ったら三時間の唱題を行うときに、必ずこの道が開かれると思います」（大日蓮・平成十三年十月号）と御指南なされています。どんなに苦しい時でも、一心に題目を唱え自行化他の信行に励むならば、直面する困難を必ず乗り越えられるのです。一切を開く鍵は唱題にあります。唱題に励み、行動を起こすところに自身の境界が変わり、折伏誓願の成就もあるのです。

ら、一層の唱題折伏に精進をしてまいりましょう。

御法主日如上人猊下は「邪義邪宗の謗法に誑かされた人達や、慣習的に知らず知らずのうちに宗教の正邪も解らずに、邪宗教に浸りきっている人達が大勢います。かくなる人達に対して『立正安国論』の御聖意に従い、邪義邪宗の謗法こそ、人を不幸にし、国家社会を危うくする元凶であることを知らしめ、一人でも多くの人を救済すべく、断固として折伏を行じ、正しい信仰に導いていくことが今、我々がなすべき最も大事なことであり、急務である」と知るべきであります。」（大日蓮・令和七年七月号）と仰せであります。

されば、今月は、お盆休みや盂蘭盆の法要などで、日頃会えない方とも顔を合わせる機会があると思います。未入信の人は折伏し、家族には信仰の要となる法統相続と折伏の大事を伝えていきましよう。また来月は、全国、全支部で行う「折伏強化月間」となります。支部で立てた計画をもとに皆が行動を起こし、果敢に折伏に挑戦してまいりましよう。

（令和七年八月度御講の砌）